

**11月26日 第2回次世代育成協議会 全体の意見（まとめ）  
～「子どもの虐待防止と地域の役割」の主題に対して～****1 親子への支援策の充実・周知**

地域・行政・区民ひとりひとりの働きということで、親子への支援のできる相談窓口をさらに充実させるとともに、それをいかに区民に知らしめること、周知させるということがとても大事。

**2 家庭を孤立させないかわり**

孤立した家庭をつくらないような何か働きかけがないだろうか。要するに子どもを家庭から、ただ、施設に来ていただける、あるいは何かの活動に参加していただけるということ以上に、こちらが何か積極的に家庭に対してかかわるということも考えられるのではないかという問題について検討が必要。（アウトリーチ）

イギリスのホームスタートという活動など、具体的にこのあたりに提案の一つのきっかけあるいはアイデアがあるのではないか。

**3 緊急度の高い虐待への対応・虐待に至る前の対応**

子どもの虐待ということに関して、具体的にその虐待が起きているという場合、緊急度が高いシリアスな虐待ということに対しては、これはそれぞれの専門機関というものがあ、そこに対応を任せるべきであろう。

それに対して、当初の目的である地域の役割という形で考えるとすれば、虐待に至る前の子どもや家庭に何か支援ができるのではないだろうか、いわば予防的な措置というレベルで地域が積極的に関与できるのではないだろうか。区民一人ひとりの目線から取り組んでいかれるのは、それ以前の段階で地域、あるいは一人ひとりの市民が対応できるのではないだろうか。

**4 監視し合うのではなく温かいまなざしで**

区民が何かお互いに監視し合うというような態勢づくりになっては元も子もない。それを避けながらも区民が温かいまなざしで予防的な措置ができるような、具体の何か提言ができればいいのではないか。

**5 ごく普通の生活を送っている家庭への支援**

緊急性の高いそこにはしっかりとネットを組みながら行い、そのネットを組むときにも、キーパーソンが変わったときに、その連絡を密にしていくことは大切。しかし、大部分はこの部会で考えなければいけないのは、虐待に至る前の、ごく日常的には普通の生活をしていると思われている、そこへの支援体制であろうというふうに思う。

## 6 いくつかの時期に応じた支援体制・情報

幾つかの時期に分けながら、その時期、時期に必要な支援体制、情報が必要であろうかというふうに思う。

妊娠がわかってから出産に至る前のこの出産前の支援

その子どもが産まれてまだ子どもの方から親に、保護者に対して社会的な反応をしない、まだかわいらしさというものが実感できない大変不安定な時期への支援

子どもとの関係ができてからの、2歳ごろまでのいわば幼稚園等に公的な、あるいは他の方々といろいろかかわる場のない、そういう時期の支援

保育所、幼稚園等、家庭以外のところに何らかの形で所属をしている時期の支援  
小学校前半、後半、中学以降の思春期

子育てには、いろいろな時期があって、そこにかかわっている方たちがどんな支援をしているかというのを、一度列挙してもらって、それがどう協力体制を検討することが必要。そういう支援体制のある時期から、いきなり子育てのストレスに入ってくる。もう周りは、生まれたお祝いをしていて「よかった、よかった」と言うけれども、自分は何かもうお役御免みたいな、そんな意識で立ち直れないまま、子育てのストレスにはまっていくという方もやはりいると思う。そういういろいろな時期にいろいろな形が周りで応援しているということ、やはりもっと綿密に上げてもらって、それでそれをどう連携をとるかというのは、ちょっとこれからの課題にしていきたい。

## 7 子育て支援者の養成とネットワーク化

「ゆったりーの」で、子育て支援者育成講座を実施している。ここ新宿区のさまざまな機関等で実際に子育て支援をしていらっしゃる方々の実践例などを皆で聞いている。そういう中で、本当に新宿区はそれぞれの組織、それぞれの機関のところでは、いろいろな取り組みがなされているが、なかなか真の意味でのネットワークになっていないというところが、一つの課題であろうと思う

## 8 ネットワークを生かすための人材育成・活用

ネットワークというものをもっと機動的にしなければならないと思う。今ネットワークはやはり語でいろいろなところで使われてはいるが、実際それが本当に機動的に動く、あるいはその予防の段階で広く展開ができるだけの人材をそろえたネットワーク組織になっているかという、全国的に各地方自治体でも苦労しているという状況だと思う。

ネットワークを有効に生かすために重要なもの以下の3つの部分だと思う。

人材育成

育成した人材を生かす仕組み

それを活性化させるための財政投入

育成の面で例えば、「ゆったりーの」の子育て支援者養成講座などもその一例だとは思いますが、現実的にその人たちが講座を終えた後に、活躍できる場が本当になくないというのが、新宿区に限らず全国あちこちで見られている。その方々が活躍できる仕組みづくりを、やはり行政とそれから民のいろいろな知恵を借りながらいかにつくっ

ていくのが、非常に大きく望まれていると考えている。

## 9 たくさんの情報の生かし方への課題

例えば、資料をたくさんいただくが、それがどういう意味を持っているのか、どうしたらそれが生かされるのか、この説明がないためにそのままになっている。つまりたくさんものを時間をかけてつくっても、それが生かされた資料になり得ていないという状況があるのではないかということを実感している。

健診であるとか、さまざまな場でやはりゆとりのある対応がまだできていないのかなということは思う。ですので、例えばそういったさまざまなところでやるときに、そこに少しゆとりある状況をつくる中で、何気ない話の中に、実はその非常に困っているというような問題が潜んでいることがある。そういったところに気づくことのできる、やはりある意味専門性を持った方が、そこにかかわっていくことが大事。母子手帳バックの中にはたくさんの資料があり、でも何が入っていて、いつ活用するかもわからない、その利用の仕方がわからないという部分で利用されていない。それを整理するのにボランティアというのはありかなと思う。ファイルの中にわかりやすく整理をしました、このファイルを分けたのは私ですってというような、コメント入りの地域の人たちの顔が見えるような、ファイルバックを提供できるような保健センターの取り組みになってくれるといいなということ、区民会議の中でも提案してきた。

どうしても情報が欲しい、情報さえあれば動けるんだというのがあがるが、やはりその情報を得るためにどうしたらいいのかという部分での動きをどうしたらいいか。やはり自分たちの方からPRして、私このまちの中で何でも聞いてくださいって思っているということ、保健センターなりに提案しようかなと思っている。

## 10 精神的な疾患を持った方々への対応と一般的な家庭への対応

今回のアンケートの結果にもあるが、保護者の中に心を病んでいる方たちがかなりいらっしゃる。そういう方々に対しては、やはりその専門的な知識、技能等を持った方でないと、なかなか対応し切れない側面もあるかと思う。

したがって、この2番目のごくごく一般的な家庭にかかわるときに、区民も含めて非常に広いところからの支援者と、専門的な技量を持ったその支援者、これらがまさに協働して行っていくことが大事だと思う。

## 11 虐待の予防の部分にどう対応するのかという視点

レッドゾーンと呼ばれるレベルのケースの話が非常に多く、それはもちろん重要だが、多分今回のこの部会の中で重要なのは、この予防というところをどうするのかというところなのではないかなと思う。

予防の部分というのはどういうふうにしていくべきなのか？やはり新宿区は非常に人口も多い周密地区でもあり、面展開をしていかないと現状のネットワークではとても把握もできない。また予防という形で実際に活動するというそれだけにやはり人が必要になってくる。あとは恐らく非常に、国籍も含めまして多様な地域であるということで、多様な人材をそろえる必要がある。非常にチャレンジ的な取組みを

要すると思う。

## 1 2 相談するアクションが取れない方に対するアプローチ

相談の場所をつくることももちろん重要だが、相談するアクションが取れない方に対して、どのようなアプローチをするのかということも一つの多分大きな課題である。それに関しては、多分金銭的に困っている方をサポートするシステムは、既にかかなり充実していると思うが、それ以外で、これからまだできることというのは何だろうかということではないかと思う。

## 1 3 ホームスタート（イギリス）の例

一例だが、イギリスの方では、10年、20年前から深刻な状況が日本よりも先にあり、それにどう対応するかということで、「ホームスタート」というシステムがある。これが、全国の90%を網羅するネットワークになっており、完全に予防に特化している。プロフェッショナルなコーディネーターや研修を提供できる人はもちろんいるが、基本的に家庭訪問のシステムである。

0歳から5歳未満のお子さんがいらっしゃる家庭への必要性が高い。しかし、少し気になりながらも、こにちは赤ちゃん事業もノック1回など、限られた回数であり、保健師さんはそれ以上時間を割けないし、お金にも限界がある。そこで、それをカバーするために、ボランティアの人に必要な知識とできるようなバックサポートの体制をしっかりとって行っていくという、そんなシステムがある。

新宿区でもこれから面展開する上では必要だろうということと、そのシステムを見ている、行政と民間の協力するという非常に明確な役割分担というものが、仕組みをつくる中で出てきていますので、今後は次のステップとしては、新宿区はそういうのも必要なのではないかなと思っている。

イギリスの事務局長の方にお話を聞いたが、保健師さんは保健師さんで全戸訪問を行っている。ヘルパーも、ベビーシッターだってある。しかし、いわゆる本当の仕事でなく、ただ自分の話を聞くために週に1回2時間ボランティアの人がやってくるってということが、どれだけ非常に不安を抱えていたり、いる方、外に出て行けない方の気持ちを支えて、劇的な変化を生むのかというところである。説明を聞いて、そこはボランティアというところへもこだわっていた。

## 1 4 区民ボランティアの活用

新宿区民の中には、やはり何とかしなきゃいけないというふうに思いは持っていていらっしゃる方が実にたくさんいらっしゃると思う。その中で、ただ1つはやはり家庭に入るとなった時に、今は保健師さんや民生委員さんなどの肩書がある方ではないとなかなか信用できないという現実もある。しかし、保健師さんであるとかそういった肩書のある方に対しては構えてしまうけれども、フレンドリーなボランティアの方だったら、何となく気持ちがオープンにできるということもあるんで、いかにそのボランティアの人たちが、クオリティーを持って、また認知もされながらアプローチをしていけるのかという環境づくりというのが、多分一番行政として必要なところだろうと感じている。